

クジラ文化伝える1冊

旭の写真家 121点収録

旭市在住の写真家、小関与四郎さん(75)が、商業捕鯨中止直前の1986年、和田町(現南房総市)の和田漁港に水揚げされたマッコウクジラ解体の場面をとらえた写真集「クジラ解体」(春風社)を出版した。捕鯨の是非を巡る国際的な論議が続く中、小関さんは「日本の捕鯨文化を伝える客観的な資料。捕鯨問題を考える参考書にしてほしい」と話している。

A4判208ページ。2009年にマッコウクジラが九十九里浜に打ち寄せられた現場、和歌山県太地町の古式捕鯨の史跡なども含め、すべてモノクロの写真計121点を収録している。「マッコウクジラ解体普日」と題した章では、作業場を埋め尽くす小山のようなクジラが海から引き揚げられ、作業員の手で解体さ

商業捕鯨中止直前 和田町の解体現場

れていく様子を47点の写真で記録。86年1月、水揚げの情報を知って駆けつけた小関さんは、クジラの血のりで足を滑らせながら、夢中でシャッターを切り、「とにかく、すごいとしか言いようのない光景だった」と振り返る。

和田漁港では年間26頭に限り、ツチクジラの水揚げが行われているが、マッコウクジラは88年から、沿岸での捕獲が停止されており、小関さんの写真は同漁港でのマッコウクジラ水揚げの最後の記録だったとみられる。

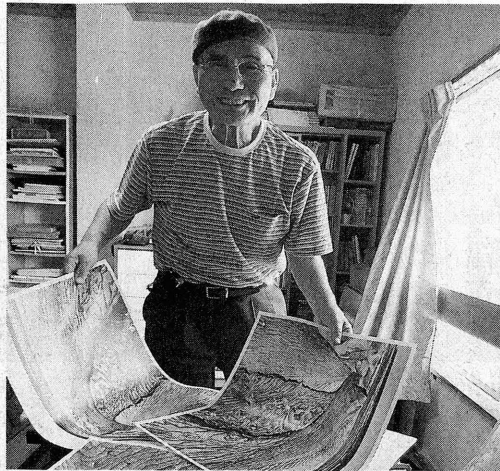
この写真の存在を知り、小関さんに出版を持ちかけた「春風社」(横浜市)の三浦衛社長(53)は「捨てる部分がないクジラは自然の大きな恵み。原発問題で日本が苦しむ今、自然との共生を考えるきっかけにし

てほしい」と願う。

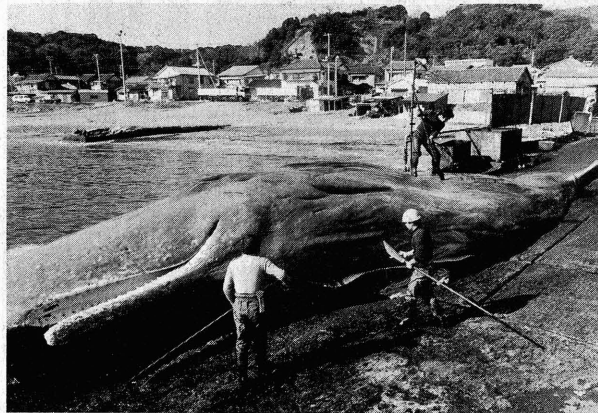
大規模な商業捕鯨に反対している環境保護団体グリーンピース・ジャパンは、写真集出版のニュースを知り、「捕鯨というものの現実を見るということは大事だ」とコメントしている。

小関さんは匝瑳市の農家の出身。独学で写真を始め、73年に日本写真協会新人賞を受賞、04年には春風社から写真集「九十九里浜」を出版した。現在、写真スタジオを経営しながら、九十九里浜を中心とした県内の風土を撮り続け、「真実を伝える写真を撮りたい。捕鯨にも一切の偏見を持たず、ありのままの姿を撮りたい」と話す。

「クジラ解体」は1万5750円(税込み)。問い合わせは、春風社(045・261・3168)へ。



自ら撮った数千枚に上る写真を手に、「写真は正確な記録であるべき」と話す小関さん(横芝光町のスタジオで)



1986年、和田漁港に水揚げされたマッコウクジラ(写真集「クジラ解体」から、春風社提供)